

臨床看護学

1 構 成 員

	平成 28 年 3 月 31 日現在	
教授	4 人	
病院教授	0 人	
准教授	3 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	1 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	6 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	1 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	4 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	19 人	

2 教員の異動状況

佐藤 直美（教授）	（H9.8.1～H18.3.31 助手；H18.4.1～講師；H23.10.1～准教授；H25.4.1～現職）
安田 孝子（教授）	（H16.4.1～H25.3.31 講師；H26.4.1～現職）
武田 江里子（教授）	（H21.4.1～H25.9.30 講師；H25.10.1～H27.3 准教授；H27.4.1～現職）
森 恵子（教授）	（H25.4.1～現職）
倉田 貞美（准教授）	（H18.6.1～H27.3.31 講師；H27.4.1～H28.3.31 退職）
千々岩 友子（准教授）	（H25.4.1～現職）
菅野 久美（准教授）	（H27.4.1～現職）
宮城島 恭子（講師）	（H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職）
杉山 琴美（助教）	（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
足立 智美（助教）	（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
牧野 公美子（助教）	（H18.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職）
坪見 利香（助教）	（H19.4.1～現職）
河島 光代（助教）	（H21.11.1～現職）
田坂 満恵（助教）	（H22.4.1～現職）
木村 幸恵（特任助教）	（H25.4.1～現職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 27 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	4 編	(2 編)

そのインパクトファクターの合計	6.48
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	3 編
そのインパクトファクターの合計	0.00
(3) 総説数 (うち邦文のもの)	0 編 (0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4) 著書数 (うち邦文のもの)	1 編 (1 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	0 編 (0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 菅野久美、秋元典子、眞嶋朋子：外来化学療法を受けるがん患者の心身緊張状態と緊張緩和のための対処過程 日本がん看護学会誌, 29 (2) : 14-23, 2015.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Nishizawa D, Kasai S, Hasegawa J, Sato N, Yamada H, Tanioka F, Nagashima M, Katoh R, Satoh Y, Tagami M, Ujike H, Ozaki N, Inada T, Iwata N, Sora I, Iyo M, Yamada M, Kondo N, Won MJ, Naruse N, Uehara-Aoyama K, Itokawa M, Ohi K, Hashimoto R, Tanisawa K, Arai T, Mori S, Sawabe M, Naka-Mieno M, Yamada Y, Yamada M, Sato N, Muramatsu M, Tanaka M, Irukayama-Tomobe Y, Saito YC, Sakurai T, Hayashida M, Sugimura H, Ikeda K: Associations between the orexin (hypocretin) receptor 2 gene polymorphism Val308Ile and nicotine dependence in genome-wide and subsequent association studies. Mol Brain, 8:50, doi: 10.1186/s13041-015-0142-x, 2015. (IF 4.90)
2. Nishizawa D, Kasai S, Hasegawa J, Sato N, Tanioka F, Sugimura H, Ikeda K, Dobashi Y: Association between AKT1 Gene Polymorphism rs2498794 and Smoking-Related Traits with reference to Cancer Susceptibility. Biomed Res Int, 2015:316829. doi: 10.1155/2015/316829, 2015. (IF 1.58)
3. 大見サキエ, 安田和夫, 森口清美, 高橋由美子, 畑中めぐみ, 谷脇歩実, 宮城島恭子, 谷口恵美子, 河合洋子, 平賀健太郎, 堀部敬三: 小児がん患児の復学支援ツールの開発 —小学生に対する試作絵本の読み聞かせ説明効果と活用法の検討—, 岐阜聖徳学園大学看護学部看護学研究誌, 3-15, 2016.

インパクトファクターの小計 [6.48]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 千々岩友子：看護における実習指導者の課題，看護のチカラ, 20 (434), 25-28, 2015.

2. Chijiwa T. Meanings of descriptions of the status of nursing care provided by a psychiatric nurse: based on phenomenological interpretation, International Journal of Nursing & Clinical Practices 2- IJNCP-142, 2015.

3. Tsubomi R, Tokuda K, Development of a Training Program Aimed at Practical Caring for Children with Developmental Disorders - Conducting and Evaluation of the First Edition of the Program -, The 16th Asian Society of Disable Sociology, 1-4, 2015.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
(学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 倉田貞美、尾島俊之：高齢者社会福祉，一般社会法人日本家族計画協会公衆衛生委員会，保健指導ノート 2016 公衆衛生の現状，一般社会法人日本家族計画協会，東京都，100－110，2015.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

4 特許等の出願状況

	平成 27 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 27 年度
(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）	16 件 (878 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	0 件 (0 万円)
(3) 日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 科学技術振興機構(JST) による研究助成	0 件 (0 万円)
(5) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(6) 財団助成金	0 件 (0 万円)
(7) 受託研究または共同研究	2 件 (40 万円)
(8) 奨学寄附金	0 件 (0 万円)

(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）

1. 武田江里子（代表者）基盤研究（C） 母親の養育者としての発達を促す支援—育児不安に対する SAT法による予防的介入、145万円（継続）

2. 牧野公美子（代表者）基盤研究（C）・特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー） 終末期認知症高齢者の代理決定における家族と看護師の対立と一致、120万円（継続）
3. 佐藤直美（代表者）基盤研究（C）慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度を測定する国際的尺度の開発、100万円（継続）
4. 安田孝子（代表者）、尾島俊之、中村美詠子 挑戦的萌芽研究 将来の糖尿病発症者である妊娠糖尿病妊婦を未病にするケア開発と医療費削減の効果、100万円（新規）
5. 坪見利香（代表者）基盤研究（C） 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究、73万円（継続）
6. 森恵子（代表者）基盤研究（C） 集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感獲得プロセス」を促進する看護実践モデルの構築、50万円（継続）
7. 倉田貞美（代表者）基盤研究C 認知症高齢者の尊厳と治療を支える急性期病院型看護モデル開発の協働実践型研究、43.5万円（新規）
8. 安田孝子（代表者）、尾島俊之 挑戦的萌芽研究 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメントの予防に関する新機軸研究、11万円（継続）
9. 足立智美（代表者）、若手研究（B） 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて、70万円（継続）
10. 千々岩友子（代表者）若手研究（B） 精神科デイケア導入期における看護支援を包含した早期リハビリテーションの評価、60万円（継続）
11. 杉山琴美（代表者）若手研究（B） 多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築、50万円（継続）
12. 氏原恵子（代表者）、森恵子（分担研究者）挑戦的萌芽研究 手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築、10万円（新規）
13. 菅野久美（研究分担者）、増島麻里子（代表者）、挑戦的萌芽研究 がん体験者と子どもを含む家族のためのサポートプログラムパッケージの開発、千葉大学
14. 木村幸恵（分担者）基盤研究（C） 母親の養育者としての発達を促す支援—育児不安に対するSAT法による予防的介入、20万円（継続）代表者 武田江里子（臨床看護学講座）
15. 白柳聡美（分担者）基盤研究（C）・特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー） 終末期認知症高齢者の代理決定における家族と看護師の対立と一致、10万円（継続）
16. 白柳聡美（分担者）基盤研究（C） 認知症高齢者の尊厳と治療を支える急性期病院型看護モデル開発の協働実践型研究、6.5万円（新規）

(7) 受託研究または共同研究

1. 田坂満恵（代表者）ソフトプレ工業株式会社 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の研究開発、30万円（継続）
2. 武田江里子（分担者）静岡大学女性研究者研究活動支援事業（拠点型）における連携研究、「母子の福祉および母子関係に関する国際比較調査」、10万円（実費分）代表者：白井千晶

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表、総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	9 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	1 件
(3) 学会座長回数	0 件	1 件
(4) 学会開催回数	0 件	2 件
(5) 学会役員等回数	0 件	4 件
(6) 一般演題発表数	5 件	

(1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催
- 2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演
- 3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表
- 4) 国際学会・会議等での座長
- 5) 一般発表

口頭発表

1. Tsubomi R, Development of a Training Program Aimed at Practical Caring for Children with Developmental Disorders - Conducting and Evaluation of the First Edition of the Program -, The 16th Asian Society of Disable Sociology, 2015.8. 大阪.

ポスター発表

1. atanabe M, Masuria M, Nagasaka I, Majima T, Sato N, Kanno K : Difficulty when nurses support cancer survivors and their children. 19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars), Chiba, 2016
2. Chijiwa T, Ishimura K, Maeda Y : New user experiences with day care for persons with psychiatric disabilities during introductory period. The 12th Conference of European Nurse Directors Association(ENDA) and 4th International Conference of World Academy of Nursing Science(WANS). October, 2015, Hannover, Germany.
3. Takeda E, Kobayashi Y, Yuge M: The Impact a Mother's Parental Bonding Instrument and Internal Working Model Have on the Attachment-Caregiving Balance from Mother to Child, ICM APRC 11th International Confederation of Midwives, 2015.7. Yokohama (Japan) .
4. 足立智美、子宮頸部異形成と診断された女性に対する看護の現状と課題: ICM APRC 11th International Confederation of Midwives, 2015.7. Yokohama (Japan) .

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

1. 公益社団法人全国助産師教育協議会主催，本学：安田孝子，武田江里子，足立智美，田坂満恵，木村幸恵，静岡県高率大学法人静岡県立大学，聖隷クリストファー大学，医療法人社団明徳会青翔学園静岡医療科学専門学校 事務局. 第 41 回全国助産師教育協議会研修会開催，シンポジウム座長，2016.3.5-6. 浜松.

2. 安田孝子 第 28 回静岡県母性衛生学会学会長、2015.9.6. 静岡

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 佐藤直美、「ニコチン依存度の評価」、第 56 回日本肺癌学会学術集会 発癌因子ワークショップ 招待発表、2016.11、横浜.
2. 森恵子、杉山 琴美、河島 光代：看護系大学 4 年次生のトリアージ演習における学び、第 25 回日本看護学教育学会学術集会、徳島、2015.
3. 森恵子、片山はるみ：4 年制大学での学部教育における看護学生へのキャリア形成に向けた教育、第 25 回日本看護学教育学会学術集会、徳島、2015.
4. 大達さなえ、森恵子：侵襲度の高い心臓手術を受けた高齢患者の退院時における退院後の生活管理に対する認識、第 11 回日本クリティカルケア看護学会学術集会、福岡、2015.
5. 菅野久美、眞嶋朋子：外来化学療法を受けるがん患者の心身緊張緩和を促進する看護実践指針の開発、第 30 回日本がん看護学術大会、千葉、2016
6. 安田孝子、足立智美、武田江里子、田坂満恵、久保田君枝：静岡県における助産師教育に関するニーズ—施設管理者・就労助産師・看護学系学生それぞれの立場から—、第 25 回日本看護学教育学会学術集会、徳島、2015.8.18-19.
7. 安田孝子：1 歳 6 か月の子どもを育てている母親の体調と関連要因、第 30 回日本助産学会学術集会、京都、2016.3.19-20
8. 安田孝子：妊娠前の体型と子育て中の女性のおしゃれ意識との関連、第 17 回日本母性看護学会学術集会、東京、2015.6.28
9. 安田孝子、尾島俊之、中村美詠子、柴田陽介：月経周期と精神的要因との関連、第 28 回静岡県母性衛生学会、2015.9.6.

3) シンポジウム発表

1. Keiko Mori：The effects of chemotherapy-induced alopecia on daily living.15th Kyungpook-Hamamatsu Joint Medical Symposium (KHJMS), Daegu, 2015.

4) 座長をした学会名

1. 安田孝子、第 41 回全国助産師教育協議会研修会、2016.3.5-6. 浜松.

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

安田孝子：静岡県母性衛生学会 理事

森恵子：日本がん看護学会 編集委員

菅野久美：日本がん看護学会 会則・渉外委員

武田江里子：日本助産学会 専任査読委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	1 件	0 件

(1) 国内の英文雑誌等の編集

森恵子：Japan Journal of Nursing Science 編集委員

(2) 外国の学術雑誌の編集

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

9 共同研究の実施状況

	平成 27 年度
(1) 国際共同研究	0 件
(2) 国内共同研究	8 件
(3) 学内共同研究	0 件

(2) 国内共同研究

1. 佐藤直美, 梶村春彦 (腫瘍病理学), 谷岡書彦 (磐田市立総合病院検査科), 池田和隆、西澤大輔 (東京都医学総合研究所) 喫煙行動と遺伝子多型の関連
2. 萱野久美: がん体験者と子どもを含む家族のためのサポートプログラムパッケージの開発 千葉大学 平成 25 年度 平成 25~27 年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究) 研究代表 増島麻里子
3. 杉山琴美、竹下明裕 (輸血・細胞診療部) : 65 歳以上の急性前骨髄球性白血病患者における QOL 評価
4. 山本真矢, 鈴木千佳代, 宗像倫子, 中村麻友美, 近藤理子, 太田美貴 (聖隷浜松病院), 倉田貞美 : 高度急性期病院における身体拘束に関する看護師の認識について
5. 牧野公美子, 白柳聡美, 杉澤秀博 (桜美林大学) : 認知症高齢者の終末期医療を代理決定する家族への看護支援
6. 安田孝子、白井千晶 (静岡大学)、奥川ゆかり (杉山女学園大学) 母子の福祉および母子間疫に関する国際比較調査—フィリピンの St. Barnaba's Maternity Center と Wish House の現地調査—
7. 静岡大学女性研究者研究活動支援事業 (拠点型) における連携研究「母子の福祉および母子関係に関する国際比較調査」、2015 年 4 月～2016 年 3 月 分担者: 武田江里子、安田孝子、梶垣智恵 代表者: 白井千晶
8. 大見サキエ, 森口清美, 谷口恵美子, 高橋由美子, 谷脇歩実 (岐阜聖徳学園大学), 河合洋子 (宝塚大学), 平賀健太郎 (大阪教育大学), 宮城島恭子, 畑中めぐみ (中部大学), 安田和夫 (岐阜聖徳学園大学), 堀部敬三 (名古屋医療センター) : がんの子どもの復学支援構築支援のための復学支援プログラムの開発, 平成 27 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (B)

10 産学共同研究

	平成 27 年度
産学共同研究	1 件

1. 田坂満恵 (代表者) 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の研究開発
ソフトプレイン工業株式会社 (足立智美、木村幸恵、兒島恵子)

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感獲得プロセス」を促進する看護実践モデルの構築
食道がんのために食道切除術を受け、その回復プロセスの中で集学的治療（化学療法、放射線治療のいずれか、あるいは両方）を受ける患者が、「回復の実感」を感じるのは、どのような場面、状況であるのかについて患者にインタビューを行い、その結果から、食道がんのために食道切除術を受け、その回復プロセスの中で集学的治療を受ける患者の回復の実感獲得プロセス」を促進する看護実践モデルの構築を行う事を目的としている。現在、対象者への面接及び分析を継続中である。（森恵子、秋元典子¹、雄西智恵美²）¹岡山大学保健学研究科、²徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部
2. 化学療法に伴う脱毛が成人男性患者の日常生活へ及ぼす影響とその対処行動
化学療法に伴う脱毛が成人男性患者の日常生活へ及ぼす影響及びその対処行動を明らかにし、必要な援助について検討することを目的とする。6名の男性がん患者に対して自由回答法による半構造化面接を実施し、Krippendorff の内容分析の手法を用いて分析を行った結果、がん化学療法に伴う脱毛体験が男性がん患の日常生活に及ぼす影響として7つが明らかとなり、2016年香港で開催される International Conference on Cancer Nursing (ICCN)2016 で発表予定である。（森恵子）
3. 手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー能力育成プログラムの構築
手術を勧められた若年性子宮頸がん患者が、術後生活を再構築する過程で抱える不安、葛藤、戸惑等、術後生活再構築を阻害する要因を抽出し、患者がどのように対処しながら生活しているかについて明らかにするとともに、阻害要因と対処方法から初期治療として子宮頸部円錐切除術を受けた若年性子宮頸がん患者の術後生活再構築を支援する看護実践プログラムを構築する事を目的とする。現在、対象者への面接を継続中である。（氏原恵子¹、森恵子）¹聖隷クリストファー大学
4. 看護学生の手術台での臥床体験が、手術室での患者の不安軽減に向けた患者ケアに及ぼす効果
急性期看護実習において、手術室内で手術台上へ臥床を行なった看護学生の体験を明らかにし、患者の手術室入室から麻酔導入時までに必要な援助を明らかにすることを目的に、「手術室オリエンテーション時に手術台の上で臥床体験をしたことが、患者の麻酔導入までの不安軽減への援助に、どのように役立ったか」についての課題レポートを分析データとして、Krippendorff の内容分析の手法を用いて、質的帰納的に分析を行った。分析の結果、急性期看護実習における看護学生の手術台上での臥床体験として5つが導き出され、また、患者の手術室入室から麻酔導入時までに必要な10個の援助が明らかとなった。日本看護学教育学会第26回学術集会で研究成果を発表予定である。（森恵子、岡美帆¹、河島光代、杉山琴美）¹浜松医科大学病院手術部
5. 慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度に関する研究
腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、様々な要因に影響を受けている。痛みを体験している患者がそれをどのようにとらえ向き合っているかを明らかにする国際的に使用可能な尺度の作成が本研究の目的である。日本と米国で慢性腰痛患者にインタビューを実施し、そこから得られたデータを質的に分析し、質問紙の素案を作成中である。（佐藤直美、佐藤友紀¹、増井健二²、Rob Stanborough³）¹

6. 進行性脳卒中患者の病の体験の構造

進行性脳卒中の中でも Branch atheromatous disease(BAD)は機能予後が不良な場合が多く、患者の苦悩は非常に大きい。障害と共に生き、自己実現性への支援に対し看護職は大きな課題を担っている。この研究の目的は、語りから病の体験の特徴を構造化すること、生活再構築に対する支援への示唆を得ることである。現在5名の対象者へのインタビューを実施した。引き続きデータ収集、分析を併行して実施予定である。(河島光代)

7. 多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築

インタビューデータの分析を実施し、多胎妊婦に関わる看護師への質問紙調査および対象者への看護への要求に関する質問紙調査票の作成を実施した。(杉山琴美)

8. 65 歳以上の急性前骨髄急性白血病 (APL) 患者における QOL 評価

高齢 APL 患者の QOL と治療に伴う有害事象との関係を検証することで、患者が QOL を保ちながら治療を受けるために必要な看護方略を検討することを目的に国内多施設で追跡調査を実施している。(杉山琴美、竹下明裕)

9. 高度急性期病院における身体拘束に関する看護師の認識について

高度急性期病院では、患者は疾患や外傷によって意識障害、見当識障害やせん妄状態となるため状況を判断できないことが多く、患者の危険行為防止や治療の安全遂行等を目的に幅広い年齢層の患者に対し、身体拘束（拘束）を実施することが少なくない。調査対象病院では拘束の開始・解除の判断の統一化のため、2006年に「身体拘束運用マニュアル」を作成し拘束の開始・解除時には、医師および複数の看護師と3要件を満たすかどうかについて十分話し合い、チェックリストを活用し患者や家族に説明し同意を得てから実施すると定めた。しかし、2014年12月の身体拘束の実態調査結果では、①複数の医療者での話し合いが十分なされていないこと、②病棟によっては医師とのカンファレンスが定期的実施されていないこと、また③個々の看護師によって拘束実施の判断が異なっているという現状が明らかになった。そこで、2015年4-5月に看護師対象に質問紙調査を実施し、具体的にどのような差異がどの認識に生じているのかその実態を明らかにした。分析結果に基づき差の大きい認識等の均一化をめざし「身体拘束に関する学習会」プログラム作成し実施した。(山本真矢¹、鈴木千佳代¹、宗像倫子¹、中村麻友美¹、近藤理子¹、太田美貴¹、倉田貞美¹)¹聖隷浜松病院

10. 超急性期病院における認知症高齢者への看護実践の可視化

身体疾患の治療目的で急性期病院に入院する認知症高齢者が増加しているが、急性期病院では介護施設とは異なり、救命や治療の安全遂行を責務とするため、多発している認知症高齢者の治療妨害・拒否・危険行為等への対応が困難で深刻な問題となっている。対応の難しさから薬剤投与や身体拘束等に頼らざるを得ないのが現状で、その結果、高齢者が廃人のようになる等の深刻な弊害が生じている。そこで、急性期病院の病棟看護師、認定・専門看護師との協働で、急性期病院での認知症高齢者の尊厳保持と治療遂行を可能にする看護実践モデルの開発を目的とし、初年度の取組として「超急性期医療における認

知症高齢者への看護実践の可視化」調査を、市内の2か所の急性期病院において実施した。調査は社会調査の一つフィールドワーク手法の参加観察法を用い、治療の必要性が緊迫している救命・治療に重点を置く「超急性期」において、どのような看護師の働きかけが、向精神薬の使用や身体拘束を最小にして、認知症高齢者の安心・安定した「良い状態」を引き出し安全な治療遂行を可能にするのか、また逆にどのような看護実践が認知症高齢者の混乱を増大させて暴力行為、治療拒否・妨害等につながるのかについて、観察に基づき質的な記録を蓄積した。(倉田貞美)

11. 日本における高齢者の終末期医療に関する代理決定の研究動向と今後の課題 (文献研究)

本研究は、日本における高齢者の終末期医療に関する代理決定の研究動向と今後の課題について、高齢者一般とともに認知症高齢者に着目して明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌 web 版と Google Scholar、CINAHL、MEDLINE を用いて検索された 247 文献を評価した結果、最終的に 31 文献が分析対象となった。発行年は、最も古いもので 2000 年、認知症高齢者に限定すると 2009 年であった。取り上げられていた課題は、代理決定を行う家族の心理的負担、高齢者の意思の反映可能性、支援する看護師の困難感やジレンマの 3 点であった。今後の論点には、援助する医療・介護の専門家と援助される家族それぞれの一方の見方ではなく、双方の相互作用の過程を解明すること、そのことによって家族と専門家双方にとって満足のいく代理決定の方法を明らかにすることができることが示唆された。研究成果は日本老年看護学会第 20 回学術集会で発表した。論文としてまとめ、現在、学会誌に投稿中である。(牧野公美子, 白柳聡美, 杉澤秀博¹⁾)¹⁾桜美林大学

12. 認知症高齢者の終末期医療決定プロセスにおける家族と看護師の相互作用の様相

文献研究の結果を踏まえて、本研究の調査対象は、本人意思が確認困難な認知症高齢者の終末期医療を代理決定した遺族と、その遺族を主に支援した看護師の双方の同意が得られたペアとした。面接調査が完了した遺族と看護師のペアは、東海・関東・近畿地方の 3 施設 (特別養護老人ホーム) から紹介された 16 組であった。ヒアリング内容はすべて逐語録として起した。今後は、質的技法を用いた分析を進めていく予定である。(牧野公美子, 白柳聡美, 杉澤秀博¹⁾)¹⁾桜美林大学

13. 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究

おしゃれをしたいという気持ちは多くの女性が抱いている気持ちである。しかし、子育て中は自分がおしゃれをするよりも子どもの世話を優先しなければならない場合があり、我慢する必要がある、葛藤がある。1歳6か月児を育てている母親を対象にして静岡県A市において質問票調査を実施し、データ収集、分析中である。(安田孝子, 尾島俊之, 中村美詠子)

14. 将来の糖尿病発症者である妊娠糖尿病妊婦を未病にするケア開発と医療費削減の効果

静岡県B市において妊娠糖尿病発症者の発症率と食事摂取量、日常生活行動に関する調査を行い、今後は妊娠糖尿病発症者が分娩1年後、2年後に糖尿病を発症の状況を調査する予定である。(安田孝子, 尾島俊之, 中村美詠子)

15. 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築にむけて

子宮頸がん検診で異常を指摘された患者の抱く思いを明らかにするために、実際に子宮がん検診にて

異常を指摘されたことがある女性を対象に面接調査実施。現在データ分析中である。(足立智美)

16. 母親の養育者としての発達を促す支援—育児不安に対する SAT 法による予防的介入—

育児不安に対する予防的介入および養育者としての発達を促す支援として SAT 法の効果を検証し、具体的活用方法を構築することを目的としている。27 年度は妊娠中からの支援として母親学級の中での活用について検討するため、通常の母親学級の育児期までの効果について調査し、パイロットスタディとして SAT 法を用いた母親学級を実施した。また、子育て支援のための支援者の育成の一環として SAT 法に関する学習会を開催（4 回コース）した。今後は分析を進めるとともに、学習会を継続させ、具体的な介入方法を検討していく予定である。(武田江里子、小林康江、木村幸恵)

17. 日外国人への子育て支援事業のための基礎的研究—在日外国人である妊婦および乳幼児をもつ母親の子育てニーズと関連要因—

本研究では、育児ストレス（不安）を感じないために必要な支援が、子育てをしやすく感じられる支援かつ子育て支援に対するニーズと考え、育児ストレスに影響する要因を外的と内的の両側面から調査し、在日外国人への子育て支援策を検討することを目的としている。調査地域に多く在住しているブラジル、フィリピン、中国、ペルー出身の母親で調査同意の得られた 243 名の母親に調査票を配布し、有効回答の得られた 200 名分を現在分析中である。今後は分析結果を基礎資料とし、在日外国人である母親および子ども・家族が、大変なこともあるけれど楽しく子育てしていけるための支援策を構築していく予定である。(武田江里子、田坂満恵、木村幸恵、松岡真理恵)

18. 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究

発達障害と診断された子どもの保護者が必要としている外来看護支援と、外来看護師が必要としている研修内容から、子どもが受診する診療科（小児科・耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科）の看護師を対象とする研修プログラムを開発した。A 県内 4 か所で研修会を実施し、プログラムの効果や課題を明らかにした。今後は、この研修プログラムを「基本編」とし、「診療科別」や「事例検討会」などのプログラムを開発予定である。(坪見利香)

19. 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の研究開発

本研究は、企業との共同研究により児頭の変形を予防するための寝具を開発し、その効果と安全性を検証することを目的としている。第一次調査において開発品の体圧分散効果・減圧効果と安全性を検証した。第二次調査として乳児期の児頭の変化を縦断的（生後 10 日以内・1 か月後・3 か月後・6 か月後）に調査した。平成 26 年 10 月～3 施設でリクルートを開始し、平成 27 年度は引き続きリクルートの追加と家庭訪問による調査を実施した。最終的に 102 名の研究協力へ同意書が得られ、調査対象の条件を満たした 58 例の訪問を実施した。このうちマット以外の寝具を併用した症例を除くと「開発品群」は 14 例、「従来品群」は 17 例となった。今後、測定方法の性能を高め、第三次調査として追加調査を準備中である。(田坂満恵、足立智美、木村幸恵、久保田君枝、兒島佳子)

20. 母親が期待する子育て支援とそれに関する要因—子育て支援の外的要因と母親の気質と養育者としての発達との関連—

本研究は、育児不安を軽減させるため現在様々な子育て支援の形態がある中で、母親が期待する子育て支援の内容やこれまで利用して良かったことなど外的要因と母親の気質など内的要因と養育者としての発達との関係性を調査し、母親自身の性格の傾向に沿った子育て支援に活用することを目的としている。1か月児・1歳6か月児健診と6か月児健康相談を受ける母親1500名に自記式無記名調査票を配布し、回収箱・郵送にて回収した。現在は回収した調査票データ分析中であり、その一部を学会にて口頭発表した。(木村幸恵、武田江里子)

13 この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

15 新聞，雑誌等による報道

1. 森恵子：静岡新聞、2015年10月31日、この人
2. 倉田貞美：浜松医科大学公開講座2015として2015年10月24日に講演した「地域で支えあおう！にこやかに年を重ねる超高齢社会」の一部内容が静岡新聞朝刊 2015年11月8日に掲載された。
3. 安田孝子：高校生カップルの乳児遺棄事件について、静岡朝日テレビ、2016年3月21日。